

飯館村実地研修が高校生の復興意識に与える影響の分析

栃木県立大田原高等学校 SSC自然科学班
栃木県立大田原女子高等学校

大島 健流 大豆生田 隼 中山 琰鶴
宇田川 理奈 白井 美翔 長 凜華

1.活動の動機

栃木県立大田原高等学校の「飯館村実地研修」に参加し、現地の状態や復興への取り組みを知ることで、震災と復興への理解を深めることができた。また、研修中に実施した「復興ディスカッション」で挙げられた復興の定義を分析する中で、復興に関する定義や考え方は人によってさまざまであることが分かった。そこで本研究では、研修に参加した高校生と参加していない高校生が考える「復興の定義」を比較し、その違いや共通性を明らかにすることで、研修への参加の有無が復興意識に与える影響を考察する。

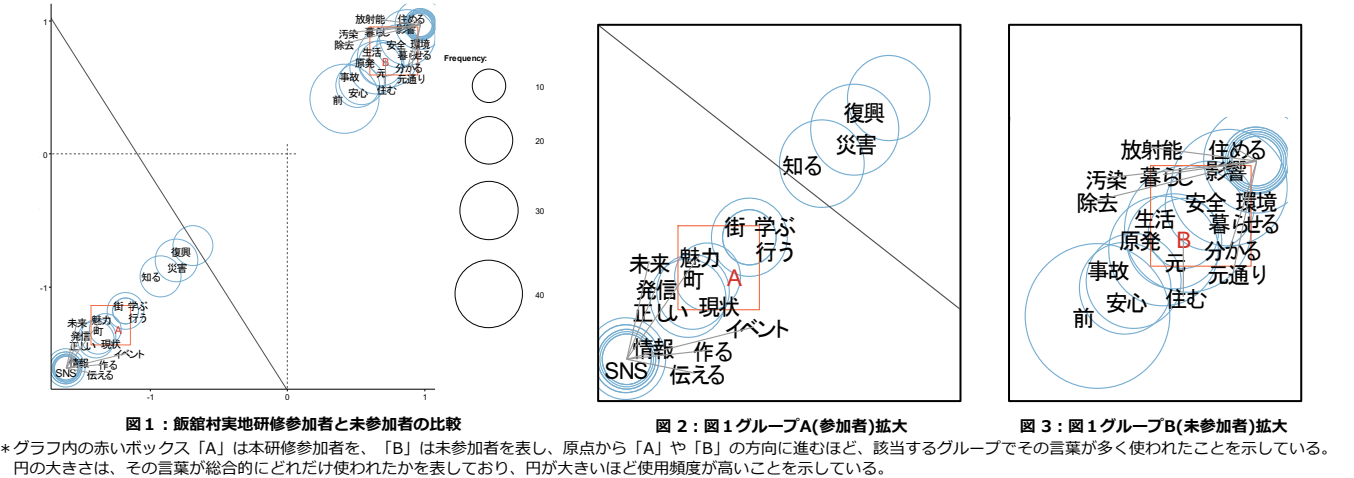
【飯館村実地研修】	2019年度から毎年秋に福島県相馬郡飯館村を訪問する。復興の歩みや放射線、農業IoTや関連技術を学ぶことを目的としている。
参加者	生徒51名（栃木県立大田原高等学校、栃木県立大田原女子高等学校、さいたま市立大宮北高等学校）、教員5名、大学院生・大学生7名
9月20日（1日目）	・研修 交流事業①：飯館村（飯館村長泥地区環境再生事業、図画倉庫）見学 交流事業②：放射能濃度測定、埋設土壌の放射線量測定、堆肥づくり体験、動物モニタリングカメラの設定体験 交流事業③：ドローもんクイズ大会・取組紹介など
9月21日（2日目）	交流事業④：復興ディスカッション「テーマ：『復興』の定義 ～私たちが考える『復興』とは～」 交流事業⑤：東日本大震災・原子力災害伝承館、中間貯蔵事業情報センター見学

2.研究手法

本研究では、飯館村実地研修で実施された復興に関するディスカッションで挙げられた復興の定義と、大田原高等学校および大田原女子高等学校の1・2年生を対象に実施したアンケートから得た復興の定義をテキスト化し、テキストマイニングソフトウェア「KH Coder」を用いて対応分析を行った。対応分析の結果から、飯館村実地研修参加者と未参加者における復興の定義の違いを比較し、実地研修が復興の定義にどのような影響を与えたのかを考察する。

3.飯館村実地研修参加者と未参加者の復興の定義の比較

研修参加者（グループA）と未参加者（グループB）で挙げられた言葉を比較すると、二つのグループの間に明確な傾向の違いがみられた。研修参加者では「発信」「SNS」「情報」「伝える」「正しい」など、正確な情報発信や被災地への偏見を取り除くことに関連した言葉の傾向が大きかった。一方、未参加者では情報に関連する言葉が使われた傾向が小さかった。「暮らし」「住める」「生活」など、再び被災地での生活再建に関連する言葉が使われた傾向がみられた。また、未参加者からは「前」「戻す」といった言葉も参加者に比べ多く使われる傾向にあった。この結果から、参加者は新しい環境づくりに積極的である一方、未参加者は復旧や再生を重視している傾向があるという昨年の結果に加え、研修参加者は情報発信や偏見を取り除くことを重視していることが明らかになった。



4.考察

本研究では、参加者と未参加者の「復興の定義」を比較した。その結果、参加者は体験や見学を通じて「新しい地域づくり」と「情報発信」を重視する傾向がみられた。一方、未参加者は「被災前に戻すこと」や「震災以前の暮らしが送れる状態」を重視する傾向が強かった。この違いが生じた理由として見学や体験を通じて、被災地の状況を実際に確認したことが影響していると考えられる。特に、研修に参加することで参加前に持っていた印象や知識と実際の状況との違いを認識し、被災地の復興のためには正確な情報を発信し、現状を多くの人に伝える必要があると考えたのではないかと考察した。

5.謝辞・参考引用文献

東京大学大学院農学生命科学研究科 特任教授 溝口勝 氏、ふくしま再生の会 田尾陽一 氏、菅野宗夫 氏、小原壮二 氏、佐野隆章 氏、北原高次 氏、内田理 氏、合同会社MARBLING 矢野淳 氏、山口大学国際総合科学部 杉野弘明 氏、山口大学の皆様、環境省福島地方環境事務所の皆様、中間貯蔵事業情報センターの皆様、東京大学大学院 直舘晃弘 氏には現地での各種体験や施設見学などの指導助言で多大なるご協力をいただいた。また、栃木県立大田原女子高等学校、さいたま市立大宮北高等学校の参加いただいた生徒の皆さんとは飯館村現地で各種体験やディスカッションを共に実施することができた。ここに謝意を表す。

参考：『高校生視点から見た復興の定義 ～飯館村における実地研修の影響～』 大田原高等学校 SSC自然科学班